統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

T 02
N 69
10

日本における統計学の発展

第 10 巻

話し手　牧田　稔

聞き手　西平重喜
清水一郎

統計数理研究所図書室

1981年2月3日(火)

マーケティングセンタービルにて

24959

24959

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ま　え　が　き

1）この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合（A）によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*（代表者）、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三潴信邦*、森博美*、山元周行（＊推進係）

2）インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3）この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4）この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5）速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以　上

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

西平　それでは早速始めさせていただきたいと思います。

統計学の発展ということになっているんですけれども、統計は、ご存じのとおり広い分野なもので、やはり私なんか世論調査関係の統計の方の諸先輩のお話を伺いたい。

そういうようなわけで、初めに、統計関係の人たちに残すものですから、失礼ですけれども、牧田さんのお生まれは何年ですか。

牧田　私は、大正8年（1919年）6月23日でございます。ちょうどヨーロッパの第1次大戦が終わって、ベルサイユで講和条約が成立したのとほとんど同じです。人口的には、1919年の出生は少ないんですね。戦争がありましたから、世界的に子供が少ない。そのほかに、スペインかぜというのがはやりまして、あれで大分いかれたらしいんです。だから、私は入学試験のときにすごく楽だったんです。（笑）

たしか林知己夫先生は私より1年か2年先輩です。

西平　お生まれは東京ですか。

牧田　いや、私は台湾で生まれました。もちろん戦前ですから、嘉義市というのがありまして、そこで生まれまして、ちょうど北回帰線があるような、亜熱帯と温帯との境目です。

だけど、育ちましたのは台北でございまして、台北で小学校から後7年制の高等学校がありまして、内地の7年制というと大体そこで全部中学のときに高等科も定員分を採るわけですけれども、私の場合は、そのうちの4分の1だけ採りました。こんなこというとおかしいですけれども、要するにエリート教育をやるんだというので、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それで4年でおさめて、試験はないですが、旧制高校の高等科に行く、そういう学校です。だけど、7年通ったので、全くもう飽き飽きしました。(笑) 後は、東大の文学部の心理学科。

西平　牧田さん、高等学校のとき理科……。

牧田　理乙です。私は物理をやろうと思っていたんです。それでドイツ語も勉強しようということで欲張りましたら、物理で一度しくじりまして、浪人みたいなものですけれども、その後物理から心理にかわったわけです。

そのころに「心理に行く」というと、おやじが「ともかく心理なんかよせよ」といいましたので、「それじゃ天文学に行く」――要するに試験のないところへ行こうというわけです。(笑) そうしたら、「天文学に行くくらいなら心理に行ってもいいだろう」といって、しぶしぶ承諾してくれまして、心理学科に入学しました。

これが全然わからないのです。ゲシタルト心理学というので、そのころ私の同級生は11名でしたが、坊主の息子、あとは学校ができなかったやつ、それから変わり種で、私のように理科から文科へ行った者。東大の相良守次先生もそうなんです。大体3種類ですね。

西平　同級の方はどなたか……。

牧田　たとえば霜山徳爾という上智大学の教授がおります。それから川口勇、これは阪大の人間科学部の教授。それから中央大学の教授で、1人は世良、もう1人はいまちょっと名前を思い出せませんけれども、大体大学関係におさまっています。あとは、司法省の矯正関係の仕事とか、大阪の教育研究所とかです。

西平　みんな心理学に関係したところへいらっしゃった

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

わけですね。

牧田　そうですね。全然別なことをやったというのはおりませんね。

西平　結局それだけ需要はあったわけですね。

牧田　需要は広がっている、拡大時期でしたからね。数は少ないし……。

私が心理に入りましたとき、私のおばが、「心理なんかに入ってどうするの」というので、「心理でも、厚生省とか海軍省とかいろいろあるんだから」というと、「そう？」なんて疑わしそうな顔をしていまして、「私はがっかりよ」といわれた。そういう時代でした。(笑)

それで、千輪先生というのが主任教授でした。あと、私のあれじゃなかったですけれども、数量関係で高木貞治先生。そういう先生方がおられて、主任教授は桑田先生。皆さん全部お亡くなりになりましたけれども。そのころは、ゲシタルト心理学がドイツから直輸入になっていまして、ケーラーとか、レビンとか、カフカとか、そういう人たちが著名でした。

あのころはピュア・ケース論というのがありまして、要するに1つの事例をきちっと観察すれば、それで現実追求ができるんだ。だから統計なんというのはもってのほかであるという考えで、私なんかも、統計は使えないのかな、それじゃ理科から来ても余り意味がないなと思いました。

フィールドセオリーといって、場の理論というやつ、あの考証はいまでも生きているみたいですね。しゃくにさわったから、卒論では場の理論というものの検証で、知覚の実験を試してみました。要するに光点を移動させ、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それを円とか、鉛筆のとがったもののような型紙の間を通したら、軌道がどう変容するかというのをやりました。

その場合に非常におもしろいのは、左右相称の場合にはスポッと抜けるんです。それで、これの力学的というよりもベクトル的な分析ができないかと考えてみました。要するに真ん中を通るときには左右バランスがとれている。したがってベクトルが真っすぐ入ってくる。けれども、そうでないときには、場の構造がこういうぐあいになっていて、だから、これはこっちの力とこっちの力でこう滑るんだというような、そのころでは非常に斬新な考えでベクトルの分析をやりました。

いまはもう通用しない話ですけれども、事例としては11例くらいとりましたかね。そういう論文を出しまして、こんなことというとおかしいですけれども、わりと好評でして、『心理学研究』に出せ出せといわれましたが、私、ちょうど海軍に入ったときで……。

西平　何年にご卒業ですか。

牧田　昭和17年ですね。半年短くなったんです。学徒出陣の前です。昭和17年の9月に出まして、そのまま兵隊にとられました。そのときの卒業式には、東大に東條英機がやってきて、安田講堂で、わしも途中で出たんだけれども、こういうぐあいになったとかなんとかいう話をしまして……。(笑)

そのころ、まだ在学中でしたけれども、天皇が来ると大変なんですね。刑事が2人立っていまして、そういうのが衣服をパンパンとたたいて、それで運動場へ入れるわけです。私はわりと物好きなものですから、一度天皇さんを見ておこうというので、あれは卒業式ではないで

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

すけれども、海軍の軍服で行幸あらせられたわけです。恐らく16年ぐらいだったんじゃないですかね。

それで、私は一応陸軍で現役でとられました。入ってから、もうどうしようもない、すごい弱兵だったわけです。変な話ですが、痔が悪くて、それで貧血みたいになって、2カ月半くらいでぶっ倒れましてね。要するに胸膜炎、いまでいう肋膜炎で、派手に40度くらい熱が出まして、陸軍病院に担送といって担架で運ばれました。担送ですと、掃除も何もしなくていい、ただ寝てろというわけです。慰問団がやってきて、いろいろなものを持ってきてくれるし、すごくよかった。これはだんだんよくなっちゃ困るなと……。(笑)

そのうちに、あれは3カ月以内にそういうことがあると、現役免除にするらしいのです。胸膜炎というのはその中に入っていたらしいんですね。それで、「おまえは帰れ」「しまった……」(笑)

そのころ、幹部候補生要員だったものですから、そういう中隊の1つの班があるのですが、その連中たちとは1人も会ったことありません。ちょうど17年から18年にかけてですから、みんな南方か満州に行って、恐らくほとんど死んじゃったんじゃないかと思うのです。連絡のとりようがないのです。岐阜の連隊でしたから、岐阜にでも住んでいればそういうことができたかもしれませんけれども、1人も会ったことはありません。私だって、もういなかっただろうと思いますけれども、あのころの年代で幹部候補生になった人たちは一番ひどいですね。それで半年くらい療養して、それから海軍の技術研究所に文官で入ったんです。またとられちゃかなわないと思

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いましてね。それが18年です。

海軍の技術研究所では兼子宙さんが柱だったんですが、だんだん大きくなって、上に少将か何か来るようになりましたけれども、大体兼子さんが親方でしたね。

それで、私が命ぜられたのは基礎研究です。これはしめたというわけで……。それで、性格のテスト、大体適性検査が多いわけです。航空隊の方は霞ケ浦の方で、技術研究所じゃないですけれども、やはり適性検査。それから、あれは恵比須のところで、ちょっと前まで恵比須キャンプだったんですが、海軍技術研究所、あそこの一角にずっとありまして、造船、化学、理学、あらゆる研究部があって、大学の研究所と同じような活動をしていました。しかも金はふんだんにある。私は基礎研究で、性格の研究、性格テストのもとをともかく考えろというわけです。

海軍に入ったら、今度はやたらに統計を使っているわけです。統計というのは、相関統計ですね。相関係数をやたらにやる。そういうのは、大学時代にはとんでもないことであるというのが、入ってみたら相関統計なんですよ。適性のテストと後の成績との相関。たとえていいますと電信兵ですね。トツー、トツーとやる、あれの適性検査とか砲術兵、そういうものの適性検査があるわけです。後になったら、電測兵という、要するに電探というやつの適性検査もやりました。大体艦船部隊の適性検査をやっていましたけれども、航空兵は霞ケ浦でやっておりました。

それで、フォローした結果と適性検査とどういう関係があるかとか、あとはテストそのものの相関ですね。い

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

まのＩＱだとか、性格テストの１つである例のクレペリンとか、こういうものを実際に使って、それの基礎的研究であるとか。だけど、「もっと新しい性格テストができないか」ということで、「むちゃいわんでくれ」とこっちはいいたいんだけれども、ダウニーというテストがすでにありまして、これはちょっとごまかしみたいなテストなんですけれども、それとか、クレペリンもそうですし、そのほか性格テストというのは戦前にもずっとあったわけですけれども、どれも信憑性がないのです。

そこで、これは命ぜられたわけですけれども、まず性格そのものがどのくらいの種類があるか、どこから手をつけていくか等について考えました。その結果、性格に関する用語を集めてみようということになりました。そこでこれらの用語を広辞林とか新聞、雑誌から集めましたが、非常に似通ったものもあるので、1200くらいまでしぼりました。しかし、統計的に処理するのが大変なものですから、それを400まで縮めたわけです。

そうしまして、ＳＤ法と同じような方法で、「かたい、やわらかい」、それから「静止的、動的」とか、そういう対句を12くらいとりまして、それを被検者にチェックをさせるわけです。要するにあれは戦後に一時はやったＳＤ法ですね。「かたい、やわらかい」「静止的、動的」「明るい、暗い」、そんなようなものを考えまして……。

西平　主に水兵か何かを対象にやるわけですか。

牧田　工員というのが100名くらいおりまして、それから士官連中で予備学生、そんなのにみんなやってもらった。それで今度は相関を取り出したわけです。最後にはどこへ持っていくかというと、重因子分析法に持ってい

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

こうと……。

これは(『教育統計学(1)』)戦後に私が書いたのですけれども、まず、女子工員がたくさんいるわけです。あとはタイガー計算機なんです。コンピュータはまだないのですが、それでも400の相関をまずとり始めたわけです。これは幾らになりますかね、400のあれですから大体8万ですか。あと相関計算表はもうできていまして、女子工員にできるようになっていたのですが、因子分析ができないわけです。

それで私が、ともかく因子分析ができるような計算法をこしらえてというので、これは中央大学の通信教育のテキストで、前に「統計数理」に青焼きのものをお見せしたことがあると思うのですけれども、それは戦後のものですが、それを戦前にやりまして、工員にも因子分析ができるようにしたわけです。それで8万のあれはできて、それから因子分析にも手をつけたわけです。

そうすると、電話帳みたいになるわけです。1つの言葉に400の相関値がありますね、それらを全部集めると3冊か4冊くらいの電話帳のようなものになりました。こんなむだなことをしているものですから、ついに日本は負けまして、(笑) 8月15日が来たとき、書類はみんな焼けということで、私もそのときは、日本はもうどうしようもないんだというような考えで、その資料を余り大事にしなかったのです。兼子さんが1部か2部持って帰ったかもしれないのですが、ともかく散逸しちゃったのです。全く膨大なる人力を投入して因子分析までできあがったわけですが、その結果も散逸しまして、いまにしてみれば、何らかの形にはなっただろうと思うのです。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

戦後にほかのところから、「あの資料はどうなっているか」と聞かれて、「それがどうも……」と答える。戦争中の統計で因子分析を使ったというのは余りないだろうと思うのです。

西平　だれの話を聞いても、あれは牧田さんだけだという話で……。(笑)

牧田　それが昭和20年まで続いて、やっとでき上がりかけてきたわけです。それが結果としてのまとまりをまだつけてない時期におしまいになっちゃったものですから。あのころは書類を焼くというのが1つの流行みたいなものでして、私もそれだけは労作なんだから持って帰ろうという気もないんですね。あれは実に残念なことをしました。

それで、終戦になった後しばらくは中学の先生みたいなことをやったりしていましたけれども、それも半年ぐらいで学校はつぶれました。

西平　海軍のときに、島津一夫さんの陸軍側から見ると、海軍は非常にお金もあり、優遇もされていて、かつまた、もう日本はだめだと、戦後心理的にいろいろパニックが起こったり何か、そういう研究も……。

牧田　それは20年に入りましてから、もう適性検査どころじゃない、バカでもチョンでもみんなとっちゃうんだし、大臣も、日本が戦場化するんだから、そういうことはもう要らないんだということで、これはやはり兼子さんがそういうところの先見の明はあったんだろうと思います。これからは少なくとも社会心理学的研究を始める。1つは流言の研究、もう1つは奇襲兵器という謀略のあれですね。そういう関係の研究をやる。あと幾つかあり

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ましたけれども、ともかくビラなんて、あのころ伝単といっていましたけれども、あれを集めることはかたく禁じられていたわけです。

それから、外国の状況がわからないとしようがないからとかいって、大本営に行って短波の受信の許可をとろうとしたわけです。そうしたら怒られましてね。こわいところには私をやるんですよ。(笑) 私は、そのころはまだ物おじしなかったから、大佐か中佐のところへ行って、「実はこういうわけで……」というと、「そんなことは情報局でやっているんだ。それを海軍技術研究所かどこか知らぬが、一部でそんなことをやるのはまかりならぬ」と怒られましたよといって帰ってきたら、主任の清宮さんはラジオが非常に得意なわけです。それで、でかい機械ですけれども、真空管でやるやつをつくりまして、「カーテンを張ってここでやろう」ということになった。

私がそれの係になりまして、もちろん工員にも聞かしたのですが、これがまたおもしろいんです。情報がみんな入ってくるわけです。8月6日かなにかに、「アトミック・ボンブが落ちた。こんなものは数限りなくあるんだ」こういっているわけです。「これは大変だ」ってね。前は、2機や3機来ても、「編隊で来なきゃそんなものは」なんていっていたのが、それからは、2機か3機で来られたときが一番こわい。大本営では、白い毛布か何かかぶれば原爆は大丈夫といっている。「何をいっているんだ、都市が1つなくなったりするのに……。東京がやられるのはいつだろうか」というので、「少数機来たる」というのが一番こわかったですよ。それは終戦間際の話ですけれども。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

前にちょっと戻りますが、性格研究をやっている19年ぐらいまでのところでは、性格のテストと、もう1つは恐怖ですね。これは現場から持ち込まれたのです。斬り込み特攻隊を潜水艦に乗せて、そして置いて、潜水艦は逃げて帰ってくるわけですけれども、おりた連中が、どう見たってフラフラになっているのです。だから、「あれは向こうで何かやっているんだろうか」というようなことをいってきまして、下士官あたりも現場でそれを見ているものですから、それじゃひょっとすると恐怖のためにフラフラになっているのかもしれないし、あるいは疲労かもしれない。ともかく陸戦隊みたいなものを乗せていくわけですからね。

そこでまず、恐怖とは何ぞやということで、お化け屋敷をこしらえまして……。(笑) そうすると、「牧田技師のところへ行くとお化け屋敷に入れられる」とPRですよ。例のうそ発見器をつけさせまして、出てきてどのくらい反応が起こったか見るわけです。そういうふうに恐怖の実験をやりました。

もう1つは、疲労の実験をやりました。1つは、そのころは戦争中なものですから、工員なんかに不眠実験をやったわけです。96時間足らずでしたけれども、眠らせないわけです。大部分は男子工員ですが、女子工員にも志願者がいて、その間全然眠らせないのです。眠ろうとしたらすぐ起こすわけです。トイレに行くとひっくり返って寝てしまう者がいるから、トイレのときも監視しているわけです。あけて監視するわけじゃないですけれども。その間にどんどんテストをするわけです。クレペリンテストとか、書く能力がどの程度落ちるかとか、反応

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

速度がどうなるか、そのほか12種類ぐらいテストしまして、それがどういうぐあいに経過していくかということを見る、そういう形で疲労の実験をやったわけです。

それからもう1つ、これは戸川さんと一緒にやったのですけれども、築地に海軍の軍医学校がありまして、そこで向こうの軍医とわれわれ心理学者と一緒になりまして、海軍の水兵を6人か10人連れてきて、気密室に1週間から10日間閉じ込めたのです。潜水艦と同じ状況の中で、その間そこで将棋をさしても何をしてもいいような形なんですけれども、一歩も出られないわけです。今度は、出るときには完全武装させる。昔のあれでいえば10貫目くらいですね。それで10里行軍させて、その間もいろいろな測定をしました。

それで、両方の結果を見ますと、疲労でテストに出てくるのは、医学的なものも含めて余りないのです。若干のものは出ましたけれども、余り出ないのです。これはやっぱり軍医学校の気密室ではだめなんだ、爆雷でいま死ぬかもしれない、上がれば必ず死ぬ、こういう状況が結局は心理的な負担となって疲労につながってくるんだ、そういう一応の結論を出したのです。要するに、幾ら攻め立てたって、特に若い連中は1週間やそこいらの実験でへたばることはないけれども、心理的な不安感があるというのは、疲労なんというものじゃない、極度の疲労が生ずるという一応の結論を出しました。戦時中でなければ、あんな実験はできませんでした。

私はいまでもそう思っていますけれども、私みたいな年になっては、もう3日も寝てなきゃ、ひっくり返って死んでしまうかもしれませんけれども、若い人たちはそ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ういうことで、要するに行動にあらわれる疲労というのはさほど大きなものではない。もちろん若干はあらわれるのですが、3日や4日ぐらいだったら全然問題にならない。

それは19年ぐらいのところですが、大体そういうことを頼んでくるのは下士官なんですよ。そのころは非常に権威主義ですから、大臣訓令というのをもらいまして、大臣の指示のもとにやる実験だというのでやったのですが、いまいったような経過になったわけです。貴重な実験でしたね。

それからもう1つは、兵隊をやたらにとるわけです。丙種合格という人たちもとる。そうすると、もちろん体の問題があるわけです。それも、テストもしないでみんな入れちゃうんですね。

もう1つ困るのは、いわゆるシュバッハジン（Schwachsinn）ですね。要するに白痴、痴愚、魯鈍というあれがありますけれども、このごろの言葉では知恵おくれというのですが、それらのめんどうを見るだけで大変だ、兵隊としてはとうてい役立たぬと思うというので、シュバッハジン・テストというのをこしらえて、入隊のときにそれをやってはじくことはできないだろうかということになり、じゃそれをやりましょうということになった。

しかし、心身障害とかなんとかというのをはじくのは、法律ではだめなんですね。手足が不自由だとかいうのはいいんでしょうけれども、知能的なものがだめだというのは、戦前のあれでは全然ないんですね。それで、これも戸川さんと一緒にやったのですけれども、私が交渉して、沼津の工作学校か何か、そういうグループがあるか

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ら会ってくれというわけで、テスト用紙をつくってそこへ行きまして、私も面接したわけです。

そうすると、そのころですから、「おまえ、いまどこと戦争をしているかわかるか」というと「わかりません」「わからぬとは何事だ。毎晩飛んできているだろう、あれはどこの国の飛行機だ」というと、「敵の飛行機であります」。(笑) そういうような問答ですね。どこの国なんて聞かれたって、それはわからない。そういう人のあれは、言葉数が少ないわりに非常に幅が広いわけですね。敵といわれれば、なるほど、イギリスであろうとアメリカであろうと、敵には違いない。これはおれよりも偉いんじゃないかと思った。(笑)

もう1つの問題点はノイローゼですね。普通の人でも「私はノイローゼだ」なんていいますけれども、実際にノイローゼというのは、医者の言葉で心因反応といわれるのですけれども、心理的な原因で、右半身か左半身かに、島のように点々と感覚麻痺が起こって、突ついてもそこだけは痛くないのです。そこを外れると、バッと跳び上がるくらい痛い。だから、たばこの火をつけても、そこは大丈夫なんです。

もう1つは、よく映画なんかに出てくる記憶喪失と失語症ですね。そういう者が前線では、「仮病を使いやがって」というのでやられたりしているけれども、どうもやっぱり普通で見ていてもおかしいということになる。そういう者はだんだん後方にさげるわけです。その最終地はどこかというと、築地の海軍病院なんです。

そこにはひどい患者がいまして、右半身の感覚がないのです。これは心理学でもやってもらわなければならぬ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

というわけで、築地の病院でまず実態を見ましたら、かなりの重症なんです。戻ってきてもなかなか治らない。しかし、これがおもしろいんですね。「この間空襲があったんですよ」といって、みんなが「空襲だ、空襲だ」といって騒いだら、そいつも一緒に「空襲だ」という。いままで一言もしゃべれなかったのが……。だから、あるきっかけでそういうのが戻る。しかし、それを治療するといったって、われわれ医者じゃないですよと軍医は語っていた。それはただ見学するくらいで終わりました。

ところが、今度は横須賀の工廠あたりで、徴用工の中に、よく逃亡するのがいるんですね。その逃亡工員をカウンセリングで治せないかというようなことがありまして、いま心理学者で安藤瑞夫さんという、立教大学の教授をやっていますが、彼が工廠の現場にいたわけです。それで私も行きまして、カウンセリングもどきを――いま考えれば全くなってないカウンセリングだったのですけれども、そういうこともやったりしたのですが、それに批判的な医師もたくさんいたわけです。後で、「あれは1週間後に脱走しました」といわれて、カウンセリングの効果は全然なかったらしいのですが、(笑) 本当に徴用工なんかのあらゆる管理をして、しかも強権でやるわけですから、普通の人間なら脱走もしたくなるでしょうけれども、そういう極端な問題が持ち込まれてくるわけです。

いろいろなことをおしゃべりしましたけれども、いまのようなことが戦前の海軍でしたことです。

西平　因子分析なんかはどういう本で勉強なさったので

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

すか。

牧田　古賀行義先生が因子分析の本を書かれていたのと、それからサーストンの原文があったんです。

西平　それは海軍にですか。

牧田　海軍にあったんです。

それで、古賀先生のもいいんですけれども、それが実際に工員にでもやらせられるかというと、そこのところがないわけです。そのころは、これだけやっていればよかったようなあれですから、原文と古賀先生のあれとを合わせながら、私なりに、ダイメンション（次元）というのはどういうものかとか、それからダイメンションも、ほかのものは消えちゃっていきなり出てくるのは一体どういうわけかと一生懸命考えました。これは18年ぐらいだったんじゃないですか。

そのころ私は湯島天神のそばに下宿していました。湯島天神には石段があるわけです。そのころは、飲もうにも何もないのですけれども、トコトコ石段を上がりながら、どうしてあれが消えちゃうんだとか、そういうことを考えた。いまでも、あのときの湯島天神の階段と、月が出ていたことを覚えていますが、自梅は気がつきませんでした。梅の時期じゃなかったのかもしれない。（笑）

それで、18年の初めごろですね。あるいはそれより後かもしれません。18年か19年の初めぐらい。計算方式を考えた。それで性格用語の因子分析、その前に相関係数、それから因子分析が指示さえ与えれば自動的にできるようになりました、実験データだけ与えて。それは19年ですね。そして戦後になって、要するに世論調査の関係で、水野坦さん、林さん――林さんはちょっと後だったよう

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

な気がしますね――たちとおつき合いするようになりました。

西平　この間話を聞いても、世論調査には水野さんは初めから興味を持っていたけれども、林さんは、そんなものはだめだと思っていたと、やっぱりこのヒヤリングでおっしゃっていました。

牧田　あれは一番最初のころは、私なんか、農林省の配膳室みたいなところにいたんです。統計数理は、昔の東拓ビル、大蔵省なんかが入っているところで、その中の一室でした。

しかし、それはちょっと後なんですね。戦争になって、みんな失業オーケストラになって……。それでいろいろなことをやったけれども、陸軍もそうですが、海軍の出というのは相当いろいろなところで活躍していますね。林君は陸軍ですけれども、心理関係は海軍が予備学生としてとったんですね。その連中が、肥田野さんだとか、霜山とか、世良とか池内、森田たまの息子も入っていますが、大体優秀なところが東京にも残っているし、地方にも大分残っています。

西平　海軍の技研では、戦争後アメリカの軍とは直接接触はなかったのですか。

牧田　私は接触しませんでしたけれども、みんな接収に来るわけです。それに立ち会われたのは兼子さんですね。上にいる部長の少将なんというのは逃げ足が速い。「あと頼むよ」といって、自分は一番先にといってはおかしいけれども、ともかく早く退散しましたね。

残務処理には兼子さんが残ってやった。久保良敏さんも残ったかもしれませんけれども、われわれはやじ馬み

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

たいな下級ですから。それでも9月の半ばぐらいまでは出ていっていましたけれども、私の家が茅ケ崎だったものですから、こっちの方に進駐軍が先に来ましてね、危なくてしようがないんですよ。夜なんかやってきて、いまでいうコンドームみたいのを見せて「女を出せ」というわけです。「そんなもの、ここの家にはいない。自分はプロフェッサーだ」というと、「何のプロフェッサーだ」というのです。そこで「サイコロジーだ」というと、「クレージー，クレージー」なんていって帰っていったけれども……。(笑)

あとは、うちのおやじのところに中学校をつくるとかいう計画があって、そこにしばらくいましたけれども、つぶれました。そうしたら昭和21年ぐらいに、久保さんあたりは輿論科学協会の創立のことで奔走していたわけです。そのときに、池内君の方が私より先に入っています。戸川さんも関係しておられました。私は11月ぐらいに呼び出されまして、私もちょうど失職しているし、世論調査の方がおもしろいんじゃなかろうかということで、たまたま久保さんからも声がかかったものですから、設立の前に行った。

ただ、池内君と久保さんは、この「廿五周年誌」には詳しく書いてありますけれども、嘱託で、農林省から扶持をもらったわけです。ところが、私は無給嘱託だから、海軍で税金のお金をもらったのが最後でして、それ以来ないんですね。

そのときに、昭和23年ですかね、前に日本世論調査協会に私が書いて、今報みたいなものに出たのですが、後に「マーケティング・リサーチ」にも再録してくれと

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いうことで、「世論調査事始め」というのがあります。そこに書いているのですが、都知事選というのが昭和22年でしたかにありました。そのときに輿論科学協会で選挙予想の世論調査をやりました。これはわりと有名ですね。無作為抽出法というので、エリア・ランダムですね。名簿も何もないものですから。

無作為抽出法というのは、そのころでは余り考えられていない。むしろやっぱり昔からのクォータ・メソッドしか考えていませんからね、断固として無作為でやるべきであると主張したのは水野さんだったと思います。そうしたら兼子さんが、「そんなことして、君、大丈夫？」といっていましたが、一応それでやりましょうということになって、都知事選で、全都で500ですかね、50地点で1地点10票だったと思いますが、それが昭和22年です。

続いて今度は、東京3区の選挙がありましたね。都知事選は、おかしいぐらいピタッと当たっちゃったんですね。そのころですから、新聞であろうと何であろうと、革新の優位しか書かないわけです。世論調査をやってもそうだという調子で。社会党の田川という代議士が当選と、みんなそれで1列に並んでいるわけです。あのころは、共産党も野坂が帰ってくる、やれ何だかんだって、ジャーナリストにとってはそれ以外はないというような調子で、世論調査の結果もそういうぐあいに出ていたのです。

ところが、うちのは全然逆なんです。それで、有効投票数で比べると、当選者は0.3%くらいしか違わない。それはたまたまでしょうけどね。次の東京3区なんかでもそんなに違ってなかったんです。いまから考えれば、

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

それでするというのは冒険なんですけれども。400で、あとの300票ぐらいが、順位はいいんですけれども、今度は7%くらい違っていましたね。都知事選がやたらに当たって、これはメーキング"ではないかともいわれましたが、私としては、これで社会調査の1つのジャンルが開けたぞというのが、そのときの感じでしたね。こういう無作為抽出法を適用した調査から発展していく社会調査、並びに社会事象の研究というものがこれでいけるんじゃないかということを、そのときには非常に感じたわけです。

また、そのころ佐藤良一郎先生の講演で、ストラティフィケートすれば精度が上がるといった計算のお話もありました。それで、われわれとしても、それ以後何年間かは統計数理に非常にお世話になった。それから、統計資料の調査がいつ始まったのか、「廿五周年誌」には書いてありますけれども、ある時期から、「世論に聴け」という社説と同時に、東京新聞からの委託を受けてやる調査が始まった。

これは毎日さんに申しわけないですが、そのころ、宮森喜久二さんという方が部長さんでいまして、宮森さんが、「おたくは東京だけやっていればいいんだからな。私たちは全国やらなければならぬ」といってこぼすんですよ。全国やると、やっぱりおくれるんですよ。東京というと1日か2日でやっつけちゃうわけです。そして同じテーマであれしますと、結果が余り違わないんですね。だから、宮森さん、ぼやくまいことか。

西平　それで彼は、全国調査員網をつくることに情熱を燃やしたんですね。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

牧田　こちらも商売だから……。そうしたら、毎日さんじゃなくて朝日かな、どこかで一度東京新聞の企画が漏れたんですね。同じじゃないですけれども、先手を打たれまして、だからこっちはストップがかかった。そこまでの経費は払うから、あとはストップしてくれと、そんなことが1回ありましたよ。これはまずいな、なんて思いましたけれども、ともかくあれで、あの時期の世論調査としての役割りは果たしたんじゃないかと思います。

西平　あべこべに宮森さんが、朝日が全国調査をやる、これがいいテーマで、いまからじゃ追いつかぬといわれるわけですね。じゃあ東京だけでやって、ちゃんと「東京だけだ」と書けばいいじゃないかといったんです。それで東京だけでやって、朝日より1日早く出しましたけれども……。(笑)

牧田　あの時期はまだカストリの時期でしたね。そのころは久保さんが専務理事で、私は酒好きなものですから、カストリ焼酎が飲みたいのですけれども、金がないのです。どうしたって久保さんに連れていってもらわないと飲めないわけです。(笑) 彼としても、3度に1度は「じゃあね」なんていって別れる。私は「しようがない。きょうは帰らなきゃ」なんて……。

あのころは料飲店禁止か何かで、有楽町に飲み屋がずらっと並んでいるのです。手入れがあって、「きょうは危ないですから」といわれると、大江山の酒呑童子みたいに尾根裏に隠れて飲む。酒は弁当箱に注いでくれる。弁当箱なら、「これは弁当を食っているんだ」といえる。(笑)

西平　大体初めから帝農ビルですか。

牧田　初めは糖業会館で、配膳室ですよ。それから今度

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

は糖業会館の2階か何かで、劇場があったところを事務所に使っているわけです。2階席だから、下で何か仕事をしているのがまる見えでした。それは最初の調査が終わってからですから、23年です。

そこでやっていたら、それこそ軍服を着た2世の軍人がやってきて、GHQのCIEというところへ出頭してくれときたわけです。そのころは、「出頭しろ」なんていわれると、ろくなことはない。そうしたら、所管の課長——いま輿論科学協会の理事で、学習院大学の教授ですけれども、山内一夫さんにも報告したら、「それはどうするかな」といわれて、山内さんと私と、あるいは池内君も入っていたかもしれませんけれども、それこそ何が始まるか、私なんかはどうということはないだろうと思っていたけれども、山内さんは相当緊張して行ったんです。

そこで、行った先が例のパッシンのところなんです。これは本当にランダムナンバーでやったのか、1軒先、また1軒先、こういうのじゃないんですかというので、これはいかにランダムサンプリングであるかというような説明をしたら、パッシンが、「あなた方、よくやりましたね」なんて……。(笑)

西平　この間やっぱりパッシンさんにもインタビューしたのです。それで、いろいろ昔の話を聞きました。

牧田　それから、何かの説明のときに、水野さんを連れていったのです。そうすると彼が、ブロークンではあるけれども、「なあ聞けよ」というような調子でやったら、パッシンがすごく気に入りまして、「あの人、もう一度連れてきてくれませんか」といわれたこともあります。

開拓村か何かの調査、これは池内君と私で企画したの

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ですが、調査のパーミッションをとるのが大変でした。政府から金が出ている調査は、GHQが全部チェックした上でしかやらせない。世論調査はまだわりと緩かったかもしれません。池内君と2人で半年くらいかかって、調査のクエッションネアや何か――ミセス何とかという女の人ですがね、そこへ通った。パッションなんかも、そんなものじかに扱って、「英語助けて」というときだって、そうこっちは向いてくれない。

西平　水野さんはCIEで知り合ったわけじゃないのですか。

牧田　そうじゃないです。それは東京新聞だから。東京新聞のときは、水野さんが一応ランダムサンプリングの計画を立て、これでやれということで私が実施したわけですけれども、私が統計数理に会いに行ったのかもしれない。

西平　細川邸。

牧田　そのころには水野さんと相当じっこんだったんです。だから、戦争直後からのつき合いじゃないかと思うんです。戦後に水野さんとどこかで――恐らく私が訪ねて行ったんじゃないかと思う。三軒茶屋の兵隊屋敷にも行ったんです。あれは後ですね。その前に細川邸ですか、それで私が覚えているのは、あのころスピードくじというのがありまして-----。

西平　三角くじみたいな-----。

牧田　それを引くとその場でわかるわけですね。何と、そのとき1000円が当たったんです。最高なんですね。その話を私が水野さんに得々とやっていましたよ。新宿の東口の前あたりにバラックの食べ物屋があるんです。そ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

こで、あのころどのくらいしたかわかりませんけれども、銀シャリを食べて、あとバターか何か買って、それから、どうせ口卑しいことをやっているに決まっているのですが、そのときにいったわけじゃなくて、その後、「実はこの間……」というわけで……。そういう時期でしたから、水野さんとの出会いは細川邸のころだったかもしれない。

東拓ビルはもっと前ですか。

西平　22年ぐらいからじゃないですか。

牧田　その前は細川邸ですか。

西平　そうです。

牧田　それじゃわかりました。これは久保さんです、会員だったから。水野さん、最初から会員だったんです。それで、統計数理で会員になった人は、水野さんのほかにいないんじゃないですかね。

西平　いずれ水野さんにも聞こうと思っていますけれども。

牧田　設立のときから会員ですから、統計学者、社会学者、心理学者、そういうのを久保さんがずっと集めて回ったわけです。そのときですよ。それで、私は設立の直前に入って、すぐ私を彼に紹介したんだろうと思うのです。その辺で彼とは知り合っているから、21年の設立時代ですね、11月か12月くらい。

それで、設立のための研究会みたいなのをやりまして、それが21年だったんじゃないかと思いますが、そのときに戸川さんと佐藤先生の2人に話してもらったのです。佐藤先生には例のストラータのbetweenとwithinのバリアンスの計算から層化の効能などの数学的な話。戸川さんには、青少年か何かの調査の結果。その発表を2人が

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

した。

そこに水野さんがいたわけです。佐藤先生はいいとしても、戸川さんに食い下がって――内容は忘れましたけれども、戸川さんに食いついちゃって、終わった後で、「あの人、何？」と戸川さんがいってましたね。(笑) 会場が丸の内にありました。だから、彼との出会いは相当古いわけですね。彼は世論調査に初めから関係したわけですね。

今度は飽戸君なんかが入ってくる時代になると相当飛びますね。これは昭和30年ごろかもしれません。それで彼は、SD法の研究調査をどうしてもやりたいというので、私は、「あんな因子分析なんか使ったってしようがない」といって頭からけなしたのですが、実費ぐらいは考えようということになって、彼はともかくSD法の研究を東大の研究室でやりまして、それで輿論科学協会の「市場調査」に発表したんですね。それが非常に反響がありまして、いろんなところから「説明がもらいたい」といってきましたが、あの号はもうないだろうと思います。だから、統計的な処理で戦後にあれしたもので一般的になっているのは、SD法が非常に早かった。

それから、あのころ試験研究費が文部省からおりていたんです。いつでしたか、水野坦氏が、「林君が研究に入った方がいいんじゃないか」といったのだと思います。そのころですよ、サイバネティックスだとかなんとかいうのが入ってきた。林さんが一番最初に外遊した時期がありましたね。それで後は、石田さんあたりと試験研究のあれでやったんだけれども、単純なリニアの分析みたいなもので、それをちょっと仰々しいような発表の仕方

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

をしたので、ぐあい悪かったですけれども。(笑)

そのときに私は、コンピュータの性能というものを伝え聞いていたんです。そのころオペレーションズ・リサーチというのがありまして、産業新語辞典か何かにそれを書いていたものがありますけれども、その辞典を書くよりちょっと前ですが、ともかくコンピュータというものは、計算に50年かかるものが大体数分でできる。そうすると、幾つファクターをぶち込んでもたちどころに計算ができるという想定のもとに、政治意識なり選挙のボーティングの予想、その他の予想は、ファクターを幾らでもほうり込めるというので、研究費をもらってやったのが最初のリニアのあれなんです。これは最小2乗法か何かでただ計算しているだけで、どうもぐあいが悪かったのですけれども。林君にも大分迷惑をかけましたけれども、やったんです。

その次から、彼が実際に自分で手がけ始めた。それが第1回目の報告ですね。本邦初演というやつで、あれは『心理学研究』に出ていると思うんです。その前に、世論の報告書として出ているやつがある。それは林さんの分析で、それが一番最初の多変量解析ですね。ただ、社会党あたりの数字をとってみると、数がうんと少なくて、発表会のときには水野さんが、「鶏を割くに牛刀を用いる、そんなものじゃないか」といわれた。数量化の発表は、林さんとしてもそれが最初じゃないですかね。

西平　研究所の方では、東知事が当選した初めのときか何かのころのが、水野さんとみんなで論じながら、2つに山を分けるなんということをしていましたね。

牧田　リレー計算機がそのころ入って、それをガチャガ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

チャやりながらプログラムを書いていたというのは、その時点ぐらいですね。

西平　初め林さんがうまくいったのは、仮釈法の予測に使って、パロール・プレディクションとかやっていましたね。

牧田　仮釈法とその辺は同じぐらいの時期だったかもしれませんね。

西平　西村さんという司法省の関係の人がその話を持ち込んできて、林さんはどっちにも一緒にやったんじゃないでしょうかね。

牧田　そうかもしれませんね。

西平　私は水野さんの下にいたものですから、その辺は余りよく知らないのです。

牧田　政治意識の研究というのは大体その辺が発祥ですね。

西平　そのころからですか、お祭り好きが投票するんだというのが林さんの主張じゃないですか。池内さんがそうじゃないという……。(笑)

牧田　池内とはしょっちゅう論争していました。

西平　あの2人は仲がいいんですね。

牧田　林君というのは、絶対相手が譲らぬとなると、今度はぼくにぼやくんです。(笑) 基本的に対立する面があるわけですよ。現象面を単純に認めていっているのが、どっちかというと林君ですね。片一方は文脈、コンテクストというんですか、そういうものを主にした考え方で、そこに含まれているものを読み取る、これが大切である。

ところが、これは統計に乗らぬわけです。乗せようとしてもむずかしいわけです。だから、その辺でガチャガ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

チャ……。

西平　それで池内さんが、「いまさら林さんに聞けないから、西平さん教えてくれよ」とかおっしゃったことがある。(笑)

牧田　私もそのころは気負い立っていたものだから、研究会のスタッフをこちらでおぜん立てはする、しかし、最終的には何かメリットを上げてもらわなければ困るというようなことで、池内君にも文句をいったり。林君とは余り違わなかったですけれど、池内君とはやっぱり違っちゃうわけですよ。

だけど、彼が亡くなって、ぼくは非常にショックでしたね。彼とは要するに、この年になってもありますけれども、何か相談したい、ほかの人にはできない、それからまた、相談したことによって漏れると困る。彼は絶対、「これは君とぼくとの話にしてくれ」というと、一言だって漏れないのです。だから、彼のところでぼやきができるわけです。そういう相手がだんだん亡くなるのですね。

唯一のそういうぼやき相手だったのですが、彼が輿論科学にいるころにやったのに、質問肢の研究とか質問法の研究というのがあるのです。肥田野君と印東君と私が書いた『心理学的測定』という古い本ですが、これにバイヤスクエスチョンや、もう1つは、ある聞き方、「あなたは」という聞き方と「日本人は」という聞き方でどんな変化が起こるかとかいった実験調査をやったものを載せていますが、一般発表は早い時期でした。久保さんがいるころか、あるいは交代ぐらいのときだったかもしれません。そうすると23～24年ですね。

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

池内は推敲に推敲を重ねているから、途中で「もうよこせ」といってバッと刷ったら、彼は青筋立てて怒っちゃってね。(笑) そして日本世論科学協会で発表したのです。彼も文句いっているから、「それじゃもうおれが発表する」といったら、途中から、「おれがやろうか」なんて……。だから、私たちも、こういうことを研究しようと思ったけどと、朝日新聞の何とかいう人……。

西平　堀川？

牧田　堀川さんじゃなくて、調査部長か調査室長か知りませんけれども、その人でしたよ。

西平　磯野さんじゃないわけですね。

牧田　磯野さんじゃなかったですね。ともかく意欲的だったんですね。

あと統計関係で、30年ぐらいから、次代にバトンタッチの時期になってきた。社会調査の関係では、飽戸君だとか、もちろん統計数理の方。それは前から一貫しているけれども、そうなってきたんじゃないかと思うのです。いわゆる多変量解析の前ですね。

西平　世論調査業で飯が食っていけるというか、会社として成り立っだろうと安心なさったのはいつごろですか。

牧田　いまだって安心してませんよ。(笑) ちょっと油断するとどうなるかという考えはあります。世論調査というよりも、食っていかれるかどうかということの1つの目安が、「先生」といわれなくなる時期ですね。業者扱いされる。だから、業者になるということが、飯を食うということとつながるわけですね。要するに業者呼ばわりされる。先生呼ばわりされるうちは、そんなもの、飯の

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

種にはならぬということですね。

だけど、自分にはやっぱり中途半端なところがあるんですね。いまはそんなことないですけれども、業者意識に余り徹してないということですね。

西平　しかし、こちらの場合は、ほかの市場調査の会社と違って、心理学的なコンサルタントみたいなことをやったりもするでしょう。入社試験の代行とかそういうようなことは、ほかの調査会社は余りないわけでしょう。

牧田　統計データよりも、どっちかというとそういう意識作業は輿論科学協会ですね。

西平　だからやっぱり「先生」といわれるあれが残っちゃうんじゃないですか。

牧田　ただ、先生と呼ばれていると、とんでもない調査を受けちゃうことがあるんですね、断り切れなくてというのが。そうすると、物すごい持ち出しになっちゃって、それが協会の次の仕事の何かになればいいですけれども、そういうメリットもなしにあれして、困った、困ったという例はありますね。

それはどこかから補助金でももらっていればあれですけれども、補助金は一銭もらってないわけです。そういう点では、なかなかそういうことをやるにしても苦しいですけれども、ともかく研究関係からは、フィールドが始まると、そっちでフィールドをしてくれないかというような話は相当ありますね。

このごろは、余り下手な受け方をされると後が大変なものですから、最低の採算がとれるような形では受けていますけれども。

西平　あとは、そういう調査をやっている会社という意

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

味で、初めから変わった点、あるいはこれからどういう点を注意しなければいけないかとか……。

牧田　これからは、経営そのものもシビアになってくるんじゃないかと思います。どういうことがといいますと、官庁関係のはわれわれはとても引き受けられない。中調はやっていますけれども、これは何本かありますからね。1本1本で採算をとろうなんて無理なわけです。だけど、官庁関係の仕事は、採算というものを別に考えなければ、いつやってもいいような調査で――ある時期は指定されていますけれども。それから、マスサーベーなんですね。

世論調査関係は比較的マスサーベーで、余り解析を伴わなかった。通り一遍の多変量解析をやってくれとか、そういうのはありますけれども。しかし、商売に関係するものは、たとえば電電公社とか道路公団とか、ましてや市場調査になりますと、マスサーベーはだんだん減ってきているのです。それで何を求めるかというと、昔のモチベーショナルリサーチみたいなものとか、それから商品企画なんかに関係するもの。

だから、統計的に何%の誤差があるというよりも、少なくともある種の情報を得て、それを多変量解析をするかしないかは別として、要するにそれでいかなるメリットを企業に与えられるか、どういう商品はどうとか、それについての原因はどうであるとかいうようなことを、マスサーベーによらずして――マスサーベーという意味は、1000人以上とか2000人以上のものをいっていますが、それを500で押さえるとか、それでいいんだというような形で、あとは解析というよりも、広い意味では解析ですけれども、それは数量解析という意味じゃないのです

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ね。そういうものも多くなる傾向があります。

そうすると、これはシンクタンクみたいな仕事になっちゃうのです。これは全く割りが合わないですね。金額は余り大きく張れない。たとえば原価が30%で、スタッフ経費が70%、それでも合わない。そして、その間、手がふさがりますからね。そういう仕事がある程度ふえてきている。その点で非常にシビアになってきていますね。非常に大量に仕事を出すようなところほど、そういう傾向が強くなってきていますね。

前は、大量に出されたものは、マスサーベーで1本が1000万円というやつでこなしていたのが、そういう仕事は出ない。せいぜい数百万。仕事の総金額は変わりはないかもしれないけれども、調査本数がふえてくる。1000万円で3本こなすとすると、3本で3000万円。もしこれが300万円だとしたら、何と10本もこなさなければならないわけですね。しかも商売に役立つ方向の分析ということで、だんだんシビアになってきていますね。

西平　変な話ですけれども、輿論科学協会に入りたいという希望者は、減らないというか……。

牧田　それは、給料も余り高くありませんからあれですけれども、ただ、この世界に入って――西平さんもご存じかもしれませんけれども、新谷君というのは、公害問題とかなんとかあったときに、市場調査に非常にシュリンクしまして、自分はもう調査の仕事はやめるといって全然違った業種に移った。しかし、最近またやっていますね。

この仕事に入ると、まず何らかの形で一生やっぱりやっていますね。会社は、やめたりかわったりしますけれ

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

ども，何なんだろうと、私もちょっとわからないのです。
西平　相当めんどうでしょう。だから、若い人や何かで志願者が減ったとか、そんなことはないですか。
牧田　それは途中でやめるという形で出るかもしれませんけれども、やっぱりまた調査の仕事をする。
　もう1つは、要するに経験者が少ないわけですね。大体においてでき上がりというのはいないわけです。そうしますと、初めは素人を採るわけです。大学で専攻しているといったって、そんなもの何の足しにもなりません。だから結局、1から始めるわけです。
　そういう意味で考えますと、そこの適性がなかなかつかみにくいんですけれども、とにかく何もわからぬ者を採るわけです。やっぱりこういう調査業では、経験者は採りづらいですね。むしろ、われわれのところにいて、メーカーに移動するとか、そういう者の方が多いですね。だから、メーカーはでき上がった者を採るわけですけれども、われわれはなかなかそうはいかないですね。
清水　先ほどの朝日新聞の方というのは、今村さんではないんですか。たしか日本リサーチセンターにいらっしゃった。
牧田　もうおやめになった方ですか。
清水　いまはどうでしょうか。ぼくはお目にかかったことはないけれども、いろいろと書いたもので……。
牧田　今村さんは私もちょっと存じていますけれども、あの方ではなかったですね。どちらかというとシャープといいますか、あるいはめがねをかけておられた。感じとしてはちょっと申し上げにくいですけれども、だから、部長さんだったかどうかはわからないわけです。よく顔

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を出されていたものですから。昔の話です。
清水　新聞社は大抵3年、4年ぐらいでポジションがかわっちゃいますから、なかなか長期継続して……。
西平　木村定じゃないんでしょう。彼はやせていて、小さい。
牧田　ある程度かっぷくはあったですね。木村さんじゃないと思う。それは世論調査の人だと私は思うんです。日本世論調査協会のあれに出てこられたわけですから。
清水　テレビの進出で、市場調査業というものがずいぶん進展したんでしょうか。
牧田　輿論科学あたりはテロップで出てますね。あれは世論調査といえるかどうか問題ですけれども、例の「100人に聞きました」という、月曜日7時からのTBSの番組で、関口宏が司会をしている、これが24～25%の視聴率なんですね。24～25%というと相当高いわけですが、延々とやっています。

ただし、それで収入の上で非常に大きいとか、儲けが多いとかいうわけではない。むしろ、メディア関係の仕事は非常に低目に抑えられている。たとえばデータバンクですね。これの基礎調査は、TBSあたりで調査機関に出ています。オリジナルな調査ですね。これもTBSが1社でやっているんじゃなくて、TBS系のネットワークで、JNNデータバンクとか……。
清水　そういう面も確かにございますけれども、昭和30年代の初めにテレビの視聴率調査というのが始まりましたね。それで、テレビの普及率が100%近くにもなってきますと、メーカーなどの広告媒体を、従来の活字のメディアから電波の方へ切りかえる。そうしたものの効果

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

を調べていくために、市場調査というのが盛んになって……。

牧田　そういうものの効果の測定になりますけれども、広告効果測定というのは、大きな調査をやるときには必ずつきますね、市場調査関係というか、メーカー関係では。それだけで非常に大きいものをやるというのは、たまにあります。たとえば春のキャンペーン、秋のキャンペーンの前後調査ですね。だけど、そういうものも、傾向としては昔の方が大々的に行われているような感じですね。

いま輿論科学なんかでやっておりますものでは、CFテスト、実際のコマーシャルフィルムを使ってテスト的にやる。もちろんCMの視聴率もやりますけれども、それだけ独立してやるということは、いまのところは視聴率調査である部分カバーしているから、むしろ質的なところをそういうもので部分的にとらえてやるというような形になっているようですね。視聴率そのものは、CM効果そのものではありませんからあれですけれども、やはり視聴率とCMと両方を見る。それで、ともかく見られるものは一応CMを見ているんだという考えじゃないかと思いますね。それが証拠に、視聴率が上がったり下がったりするので、スポンサーがかわりますからね。視聴率が低くなったということは、CMを見る率が低くなったからという意味に解釈しているわけですね。

大体調査というのは、広告費に比べればもちろん問題にならないくらい少ないですね。広告費は何十倍、何百倍ですから、せめて広告費の1%ぐらい使ってくれればというようなあれがありますけれども、なかなかそうは

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

いきませんね。

清水　そうした調査データの価値というものについて、日本の企業の広告関係者はまだ認識が薄いでしょうか。

牧田　そういうことはないと思います。私なんかのところでも、ある程度中堅以上の広告会社から相当調査が来ています。それは自分のところで金を出すわけじゃなくて、広告を受けた一環の作業としてやるわけですね。

たとえば視聴率調査というのは電通さんが持っていますね。あれなんかでも、ノつはやっぱりスポンサー確保というか、そういう意味もあるだろうと思います。そういう意味では、特に電通さんなんか、自分の配下に置いているビデオリサーチ、電通リサーチというのがありますが、電通さんはともかく強いですね。ここぞと思うところには、自分のところで調査したデータを提供するという考え方が非常に強いですね。それは儲けからいえば大したことないんでしょうけれども、そういう情報を一緒に広告とするので、需要は強いと思います。代理店でも、そんな考え方をみんな持っていますね。

小さいところですと、なかなかそれだけの大きな広告は入ってきませんから、できないこともあると思いますが、小規模ながらやっておられると思います。名の通ったところは、自分のところではやらないで、われわれのところに委託されるとか、そういうものが相当ありますね。

やっぱりデータを要求されるのですね。それは何も広告効果じゃなくて、それ以外のもの。たとえば国鉄がツアーか何かのキャンペーンをしようとしていると、それの利用者はどのくらいあるのか、キャンペーンをする会

統計数理研究所学術研究リポジトリRISM

社にそれをやらせる。

そのほか、店を出すという場合の出店計画ですね。こういうものももちろんやりますし、新製品の場合も、広告を取ることと同時に調査も取ってくる。ただし、自分のところでフィールドワークができないから調査機関に任すとか、フィールドワークも自分のところでやるとか、そういうので調査活動は非常に活発だと思います。そこに費やされているお金は、われわれがいま引き受けてやっている仕事がどんどんふえていくという意味じゃなくてですね。

西平　どうもありがとうございました。